



毎日のように報道される教員の不祥事や謝罪している校長の姿に象徴されるように、今日ほど、教師であることが難しい時代はなかったといっただろう。

その渦中であって、教師は、あるいは学校は「揺れている」。

そのひとつの証拠に教員の定年がある。世間では、先生には夏休みがあって、産休や育休が保障されていて、結構な職業であると見られているが、現状は定年まで仕事を続ける先生は半数に満たないのである。ことほど左様に教育の現場は厳しい。

「人権教育・学習」とのかかわり

……教師としての生きがい

その中であって、私が、30歳前半で教師になったとはいえ、高校教師として定年までまっとうできたのは「人権教育」とのかかわりがあったからといえる。それをひとことではいってしまえば、困難な状況を克服して今も人間としてすばらしく成長している生徒たちの姿や悩んでいるときに支えてくれた同僚たちのおかげで教師という職業に生きがいを見出せたからであろう。

それは大学で教職を目指す学生たちを教えている現在でも変わらない。

教育にかかわっている先生方や保護者など多く

の方に伝えたいことだが、「揺れている」時代にあっても、教えているほとんどの学生たちは、過去に出会った教師たちを挙げ、理想の教師のモデルとしている。このように教育は生きているし、「先生」は存在しているのである。以下は、そんな一人の学生がつづったレポートの一部である。

「みんな一緒」？……ある学生のレポートから

『多くの在日韓国・朝鮮人が日本名で生活する原因の一つに根強く残る差別・偏見があります。しかし、両親は「たとえいじめを受けても韓国人だということに誇りを持って堂々と生きてほしい」という思いから私に本名を名乗らせたのでした。

小学校、中学校の頃の私といえば、「変な名前だ」とからかわれたり「韓国人、韓国人」とはやしたてられ、みんなと違うという理由から、たくさん嫌な思いをしました。

その度に両親に「何で本名を使わせたん？」と泣いて困らせたことを覚えています。

…中略… そのときの私は、ただただ「みんなと一緒に」になることへ憧れを抱き、自分の名前や韓国人という事実に対しても“誇り”というものを感じたことはありませんでした。

しかし、高校に入ってから、私の考えは一変しました。在日のことに関心を持つ先生が、在日の生徒を集めた部活動を編成、私もその一員として民族楽器をたたいたり、母国語を学んだりといった活動をするようになりました。

その高校では様々な取り組みを推進しており、授業内容も驚くほど多様で生徒の個性も輝いています。それまで、自分を縛っていた「みんな一緒」という締め付けから解放されて、自分の中での人と違う部分、在日韓国人であるということをも

ジティブに捉えられるようになりました。』

このように彼女を理解する一人の教師の存在が、そして、そうした活動を保障する学校が彼女を解放したといえるだろう。もちろん、「本名を名乗って生きること」を勧めた御両親の力もあったと考えられる。

「一人ひとり違って当たり前、違うことこそ素晴らしい」……「地球市民」として共生できる社会へ

私は、このレポートを読んだとき、人権教育の持つ力のすばらしさを改めて発見した。「人権教育」は一人ひとりの生徒たち（子どもたち）が、自分を見つめ、自分らしさを発見し、多角的な価値観を身につけ、未来に展望を持ち、ともに生きていくことを教えることだといわれる。

いま、私たちは「自由な選択による競争と差別の

社会か、異質な人々が共存し共生する社会か」という未来社会のあり方を問う岐路に立たされてる。

彼女のレポートは『「一人ひとり違って当たり前、違うことこそ素晴らしい」ということを学校教育の中で広めることができたなら、多くの子供たちが個性に磨きをかけ、より広い世界へと羽ばたくことができるように思います。』と結んでいる。

彼女が述べるように、この21世紀は、人々が「地球市民」として共生する社会になることを私も願っている。

そのためには、このような学生達が教壇に立ってほしい。そのことによって、学生達のあこがれの先生が再生産され、同時に教育という営みのすばらしさが再確認されることで、今、現場で活躍している先生方にとっても元気が出てくるに違いない。